

## 視点の違いが内部告発者への印象評定に及ぼす影響

甘利 陽樹

内部告発とは、組織における不正行為や反社会的規範をそれを制止する機関や、個人に暴露するだけでなく、新たに起こる不正行為を抑止する効果がある。その内部告発はポジティブな側面もあるが、ネガティブな側面もある。それは、「裏切り者」や「卑怯者」といった、マイナスのイメージでとらえられることもある。

また、内部告発は不正場면을認知することによって生じるものだが、この不正を認知するには個人の道徳基盤の差によって大きな違いが生まれる。しかし、先行研究では「道徳判断レベルの高い人物」が内部告発を起こしやすい、とあるが「道徳判断レベルの低い人物」が内部告発を起こしやすいという、矛盾した研究結果が存在する。

よって、本研究ではシナリオ実験によって、内部告発者の視点の違いによって、それを取り巻く印象評定にどのような違いを及ぼすかを検討した。また、参加者の道徳基盤に違いによって、内部告発生起可能性がどのように異なるかを検討した。視点の違いでは、実際に内部告発をしたというシナリオを読ませる「内部告発当事者条件」と、内部告発者を無関係な立場から観察する「内部告発第三者条件」の2条件を設定した。その後、参加者は「内部告発者自身の印象」、「内部告発者の同僚からの印象」、「世間の人からの印象」の3つの立場から、印象評価して回答させた。また、内部告発を実際にするかどうかを尋ね、そのあと、倫理観・公正世界観による道徳基盤の差を尋ねた。

その結果、内部告発者に対する印象評定はポジティブに評価されることが分かったが、条件間に有意な差は見られなかった。また、実際に内部告発生起可能性に対して、道徳基盤が与える影響についても、有意な差は見られなかった。しかし、内部告発を実際にするかどうかという項目では平均 4.5 であった。そのため、内部告発者に対してポジティブに評価しているものの、実際に自分が不正場면을認知した後、内部告発行動を起こすことへの関連性が低いことが考えられる。また、内部告発生起可能性に、今回使用した倫理観・公正世界観との関係性が薄いことが分かった。

以上の観点から、まず、内部告発者はポジティブに評価されるということが分かった。しかし、これは顕在的な評価であり、顕在的評価はその時の社会的影響に左右されるため、最近の社会的影響を受けているのではないかと考える。また、今回、道徳基盤として、倫理観・公正世界観との関係性を検討したが、いずれも有意な差は見られなかった。このことから、不正場面の認知から内部告発行動に至るまで、また異なる道徳基盤の存在が示唆される。

したがって、今後本研究が社会や組織の風通しを良くし、内部告発研究の一翼を担えることを願ってやまない。(社会心理学)